

六家集

拾玉二

8  
7  
6  
5  
4  
3  
2  
1  
0  
80  
70  
60  
50  
40  
30  
20  
10  
0

3  
9  
60  
1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10

振玉集卷第二

楚忽第一曉百首

讀人不知

春郊

立春

鈔角之音去之既已不復有之矣可謂之立春

子日

物之生氣之發之謂之春

歲

之至歲之暮之不復有之可謂之立春

立

考之古者立春之日皆用桃符以避凶氣

若葉



けやくあれまい、はうりうれのせよまゆ

残雪

ゆめくらみのせきのまくまくとまゆ

梅

ゆめくらみのせきのまくまくとまゆ

柳

ゆめくらみのせきのまくまくとまゆ

早蕨

ゆめくらみのせきのまくまくとまゆ

桜

ゆめくらみのせきのまくまくとまゆ

春雨

春うらみのせきのまくまくとまゆ

春約

ゆめくらみのせきのまくまくとまゆ

帰雁

ゆめくらみのせきのまくまくとまゆ

喚子鳥

ゆめくらみのせきのまくまくとまゆ

莖菜

ゆめくらみのせきのまくまくとまゆ

杜若

紫乃木山杜若の花が咲く

藤

紫の葉も紅葉も葉の色も赤みに色わ

欽也

もとてその山風を吹いてそぞり山風の

三月盡

これかすむ夜の袖の袖のうぐいすの葉

葛

支衣

あめの青いもあづまのうづまのうづま

かむ

この山風のやのむきもきてせせせせせせ

葵

辛いてみのみあはるあひよひひせじまゆ

時鳥

郊ふゆのやまとひのひのからくやまく

菖蒲

わやうまむのやトハひのひのひのひのひのひ

早苗

せよもよとく年少のうきのうきのうきのうき

照射

よしよしよしよしよしよしよしよしよしよし

又月ぬ

わよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

あめの備

あめのものもひらきのをとつておこなひよ

蚊をた

涼しきるにぬれやうやくは櫻の風の

蟹

くちづくあらわのあめののとよあめの

氷を

そくふねにはれ来るさくわまくは傳

泉

きぬ出の竹すすめの水すすめの水

蓮

くわくわくわくわくわくわくわくわくわく

芭和枝

みくみくの高川の秋のあめの秋立たれむ

秋

立秋

くわくわくわくわくわくわくわくわくわく

七夕

織女あゆいわくわくの秋のあめの秋立たれむ

女郎ひ

きのくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

萩

かひのよがまをかねのまにまくとておる

前

ワタリタリとすむるのをのぞみのれのま

前 薦

ねかののまつらのあはれをもつりとておる

前 兰

秋の野よあかさくらはくはくとておる蘭れ

前 鳴

もゆうとすむらきとくわくわくわくわくわく

前 麻

麻のまくはくはくはくはくはくはくはくはく

前 鳴

秋の野よあかさくらはくはくとておる蘭れ

前 鳴

続人乃秋乃タのまよしらゆゑれとくまび

前 桜

さくらとゆのゆのまよしらゆゑれとくまび

前 桜

鈴くわいはくはくはくはくはくはくはくはく

前 鳴

いあでひよせふせんそくとく秋乃まよりとく

前 月

秋の月よあかさくらはくはくとておる月のま

前 摂

えくきかまのつるまくおのまのまく

前 虫

あわすれぬめの御細やくはまたと興味のあり

菊

ノミセトハのへて向むく波をと風を下水

あ葉

ねふもよしに相ひてそぞれ秋むるに

の月盡

と夜ゆるよしに神くはゆるよし

冬

初之

きしよ秋もゆりかよみか山里へおそれ

時雨

きしよ秋もゆりかよみか山里へおそれ

小

霜

草の花がよけよ落葉で尾とのよきをせうす

霜

秋の草がよけよ落葉で尾とのよきをせうす

霜

ゆきよけよ落葉で尾とのよきをせうす

霜

秋の草がよけよ落葉で尾とのよきをせうす

霜

秋の草がよけよ落葉で尾とのよきをせうす

霜

秋の草がよけよ落葉で尾とのよきをせうす

霜

霜

秋の草がよけよ落葉で尾とのよきをせうす

霜

霜

木き

御見のうの西のアマガミトヨヒロの御見

細代

カウタツのアマガミトヨヒロの御見

祐宗

秋のアマガミトヨヒロの御見

義行

カウタツのアマガミトヨヒロの御見

庄寛

アマガミトヨヒロの御見

祐史

アマガミトヨヒロの御見

歲言

アマガミトヨヒロの御見

應

祐宗

アマガミトヨヒロの御見

忠宗

アマガミトヨヒロの御見

初宗

アマガミトヨヒロの御見

不全宗

アマガミトヨヒロの御見

後鈴宗

ゆふかすれぬトテヤタクトテハシマシテ甚だえ

急不遇意

えよひよひよひよひよひよひよひよひよひよ

旅立

時めあれども川原の暮るあの人とのうれや

思ひさがはせばおとせまくらにせまくらにせ

斤思

是れはははははははははははははははははは

恨

夕ゆくれば萬葉風かくさすやうにせよ

難

曉

きのよへお鳥方夢みて月夜のゆきのえ

松

ほの神ひてはなむ用今はまきわ

行

吾處へましむ事此の心も尋ね行ひやまきわ

鶴

やくいはははははははははははははははは

若

よのよのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

山

せよひよひよひよひよひよひよひよひよひよ

四

此處風氣甚惡

野  
記

卷

張子不以北風  
爲子也此其氣也

松  
山  
之  
風  
氣  
也  
此  
風  
氣  
也

海

卷之三

毛利元就の京山を細々とやあゆ山

乃  
之  
事  
也  
の  
事

山家

是の内はのゆく  
人馬の事  
あらゆる

國家  
小農  
之業  
者也

懷舊

卷八

此其所以爲子雲也

每常

まことに思ふ事  
おもふ事あつて  
別ある

述懷

ニハシミタクナシト御事トモアラニセマセカシル

税

若翁のいのくふるてぬつたまはまきうる  
都へとゆきの山すよあまかまうらうる  
ノリキムキナリツブリてちやのやまつす  
ものうろく俱食すよレマヨリマヨリ  
りうつまつてき徑をわづやうてあくひ  
あひくくふくのうのかよのくゆりてきく  
くわくゆめらうよそんやでましまと  
國で見まわやゆりひきうき

トモアラニシカサギト川原の百葉  
紙とりつててててててててててててて  
りふくふくふくふくふくふくふくふく  
つすのひよくひよくひよくひよくひよ  
ソソクスホトトカニ日しきの時  
此百葉のひよくひよくひよくひよくひよ  
フテテ書のひよくひよくひよくひよく  
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく  
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく  
人へとあまくまのせのやつよ  
ヤカガムスナラシの百葉

詠百首和諺

元日之春

詠百首和評  
元日之春  
壬午年正月一日  
董子曰

卷之三

あらわすよのゆめ  
夜雨行舟  
小舟に伴ひ  
舟は陶器の如きを

獨抒名素

梅雨遊遠

橋もさうらひねじるが、波もさわざわする

門のまゆ

ワタリふくろもとまよひのまよひの枝のまゆ

早巣ま遍

村のまよひのまよひのまよひのまよひの早巣

橋も盛開

弓の山すのゆきの山すのゆきの山すのゆきの

遙見春約

都の山すのゆきの山すのゆきの山すのゆきの

暁て歸雁

弓の山すのゆきの山すのゆきの山すのゆきの

暁雲あ馬

冬の夜の向ふかよおはるにゆくかよおはる

曉の風

春の夜の向ふかよおはるにゆくかよおはる

あゝ曉

夏の夜の向ふかよおはるにゆくかよおはる

杜の木

秋の夜の向ふかよおはるにゆくかよおはる

歌を序

冬の夜の向ふかよおはるにゆくかよおはる

樵路跡

中今の如きは嘗て是處に  
止む者す

藤花社總

萬葉集  
卷之三  
有山人  
ありやまに

夏

情ありて東のうへ  
今まくはる

青夏賦序

はのやうの木のまの神カミトモアモウの御ミコトミカミ

水道の方へと進んでゐる。左側は、

郭云林詩

丁未之秋  
余游於京  
是日也晴  
天高氣爽  
以爲可乘  
乃與子厚  
同游於城  
北之清源  
山中

雨中早晴

小山田の風景  
かわらけの北の風、南の風

も梅の夕月

久  
電  
明  
徳  
義

其後又得一卷，題曰《金華子集》。其文辭清麗，筆意雄渾，與前卷所載不同。蓋其後所作，非其初稿也。

深す霧川

大井川すけいに夜をめぐらし再び天せつるをまよ

天と照射

夜の月の底をすみやうとりもとすのゆき

馬と聞ゆ

あくべりくめあるそぞりからふとありわまゆる

近見地蓮

うかひゆの町のさくらとすくよのえみやれ

泉宮若楠

じげの宗がの水よ青りてはる御殿ともうつて

家と古き祓

うよのあらわ神よりらう今之祓と身引

秋  
風音秋使

萬の秋のうづく風の音より秋のはま秋葉

庚申七夕

うづく風のうづく風の音より秋のはま秋葉

萩散漫漫

うづく風のうづく風の音より秋のはま秋葉

茆葺乱籬

うづく風のうづく風の音より秋のはま秋葉

蘭香薰丸

芳草の花もあやめもあらうのほを

病聲 故聲

絶えぬるの音の桂の音もまた病の音

鳥妨は友

もむきゆすりの音も全角もかわせ

詠笑同廉

山の聲も人より詠笑の廉の聲先

雲間袖雁

ふく友を袖に引ひきの音也

流音と方言

かの音がうるさく聞えとの聲也

音中同鶴

よのすの下の音の音の音の音の音

降ト家様也

よのすの下の音の音の音の音の音

遙音也

よのすの下の音の音の音の音の音

御月

よのすの下の音の音の音の音の音

挿衣聲也

よのすの下の音の音の音の音の音

虫聲非一

よのすの下の音の音の音の音の音

萬物也

卷之三

雨過天晴

久  
留  
市  
立  
中  
學  
校  
記  
念  
碑

み  
ま  
の  
神  
の  
氣  
と  
人  
物  
を  
見  
る

國朝神宗

惟  
急草  
第  
翁

乃のあはれのあはれ

おまかせの事務局へ  
お尋ね下さい

西蜀王氏印

高麗書の西宮  
御内侍の御内侍  
御内侍の御内侍

おまのくの木の内にやふさかの花葉の風  
おまの鳥

いはるのまよ  
浪の里のまよ  
いはるのまよ

氷川月  
水  
山も羽の扇又

水馬孫  
金

細  
部  
形  
態

卷之三

楚辭  
神秀

卷之三

卷之三

アリのよ。おまけに、おまえの氣

居電のあはれの音  
かわらけの音

西  
山  
房  
藏  
書  
卷  
之  
三  
三

憲

老處  
ゆき

母  
子  
幼  
年  
之  
事

別不急急

伏幼也玄

歸  
す  
事  
志

絶樂傳

りうのとおとづれのゆきのとくわく

### 城外向風

あらわのとくと神とおとこと夜とお旅と

等思ふ人

まくのとくとまよのとくと夜とお旅と

尋常片思

人傳恨風

まくのとくとまよのとくと夜とお旅と

難

曉風漁舟

島とて奥の海とすしゆれの春の

### 洞名古松

さとくいとくとせめいとむねとくと秋と

寒前裁竹

ちとくとくとおの露と竹とて竹とて

吉鳥石衣

山川のとくとくとまよとけとまよとけとまよ

仙洞鶴多

かえのとくとくとまよとけとまよとけとまよ

梅山雅興

ちや山じやや景のとくとくとまよとけとまよ

白波立行

まくのとくとまよのとくとまよのとくと秋と

野亭一雨歸

いさり處の山風にじまきて生氣病へ夢をやく

東也園路

是の園路もとて織川月影城西にて

行客休稿

柳の下すく人ト角の下りかしらほひまづ

海路日暮

すく月夕ありとやまにて中宵はまくは夜舟

羈中風吟

すく都の旅の宿泊はまくはまくは夜舟

遣唐使餞

君ゆくもおこはらはまくはまくは夜舟

山家送年

やまとゑり独てと年をとめまし

田家老翁

まわるたる年來よからずの翁

社火祝君

三笠山の村はまくはまくはまくは年

長諾友人

まくはまくはまくはまくはまくはまくは年

深謹無常

まくはまくはまくはまくはまくはまくは年

山寺懷舊

まくはまくはまくはまくはまくはまくは年

問法述懷

前記の如きは、本筋の筋道を示すものであつて、

文治三年十一月廿一日詠之

自九鼎風流給題于宋蓮禪門相共風  
今與一宜承之

日百首十題但二時一點向詠之

花

卷之二

凡

卷五

あさひの山の風  
かみの風の山あさ  
ひの山あさひの風

五  
卷

卷之三

松

14

をとれどもあ  
うまくもとしりてわふ所景よ所行にありこち  
夕暮れの日ひゆ竹林ねくあまく村や  
次はとあるよきのり竹林のうやうよのと  
朝あさ山のよきわゆるよすれか風竹内もも  
多云ひ行のうねよけんとく  
まのうきよ人乃おとむるまの新は行よ  
ゆれうきの風のゆくの成るうがのまと  
あまくらまよわの行ひあゆりてよませよ  
あまくらまよわの行ひあゆりてよませよ

少家

山の氣がおれやかれて麻つまつ秋めく  
山と秋の身ひゆふひくのトゲさうふて  
都もとまみる山里よぢのまくはようとま  
山よあらわす山里よぢのまくはようとま  
又山へ乃むくとれのよくあらわす神りゆく  
めくとれのよくあらわす神りゆく  
絶乃のよくとれのよくあらわす神りゆく  
山の乃のよくとれのよくあらわす神りゆく  
がまくとれをまくとれのみの山

もの無人のあまの松もと、浦よりともすよ  
うきのまよはるかうひの松のてよまくねい  
こまかしてと奥をさうりて、名内村をすそ  
通てちりのあがの川をさづからつてはゆごと  
海まみおもてを西へてしのびても、まよつてりあ  
立人内川をあらむ河またまく神はほとくし  
波乃木をねがわよやくもあてせよじゆの又書  
ほのせふまんとおりするよ遠まく海がぬゑ  
おれハ舟舟をまてゆんばらのくよつて

述懐

あくまく我およへと、今まうとく人ぬまま神をもと  
あくまくさひのぬれづけは、けはとあくまくさひの  
世事とくまといふくとく。我のまくまく

神計りまくまくせよくわれて、ひやまくの月  
松の枝葉やくわ成りうて、波よまく神をもと  
くまくわくまく波ねうて、我のまくわうくの  
此ひくまくまくうて、まくわくまくまくまく  
三重山をくまくまくまく神をまくわくまく  
奇うくまくまくまくまく神をまくわくまく  
ねくまくハまくわくまく神をまくわくまく  
隆闇和示詠百首於一日に告來語仍  
誠企風吟之間年終又未始免右筆則

酉一點書付

建久元年四月八日詠之也

往古ノ神トアリテ當きよ三時たてうるふの山  
ノ間ニモアシヤマリシヒヤニ時トモテチサツ

宇治山百首

ま

立春

名川乃處よりまや立内と冰が下りゆく也

子日

年頃つてのせのさむひく松を遊ぶる人勿

宿

もあはれ浦乃邊のくらすはなむき

草

新月の山乃處は暖かき者多く其ノ

春葉

の下でくろづひ次乃通すりまゐる

残雪

去乃月才乃アタリとかられまの雪此村ニ

梅

山の梅乃白いのめぐれ致外にまわる

柳

風吹く高川の波はやく柳乃葉をそよぐ

早蕨

春風つてとる山早蕨がおれをやりぬ

桜

ワタリの海方からもまく波むすらとせんじがれ

まに西

ほてて人ねむるまく波むすらとせんじがれ山風雪

まに西

あは乃おれむれむれりあひ致むらわが事成のま

歸雁

うか秋乃月波うだりのあまうまむじよ刻

喚子馬

よしよしの月つくれてあめのうきよと夕暮れ

苗代

山のわゆ八小里ひきしわともて終ま

莖菜

あひやまの風むなはまく波むすらとせんじがれ

桔ち

藤の風むなはまく波むすらとせんじがれ

歎を

さくよまの風むなはまく波むすらとせんじがれ

三月盡

ワタリの海方の傍へまく波むすらとせんじがれ

夏

更衣

花乃みより雲海はまく波むすらとせんじがれ

४

アラタニシテハシムの御

孝

時名

葛巖集

出でや御内うちみくわちゆきのうじ

早苗

照射  
山風  
竹葉  
木葉  
也

の事と  
弟成  
の事と  
おもての事と  
おもての事と

This image shows a vertical strip of aged, yellowish-brown paper. A prominent dark vertical crease runs along the left edge. Near the top center, there is a small, faint, wavy mark or stain.

孟子

少  
年  
の  
時  
間  
は  
育  
て  
な  
く  
育  
め  
る

立  
立

卷之三

故  
此  
也

蘆

冰  
雪

泉

音よりやま此木よゑ今ハ秋月夜空風

育月絃

月給ちのうさかト六月れんへよもて秋月

秋

音よりやま此木よゑ今ハ秋月夜空風

七夕

織女乃ゆきよあめひし秋月夜空風

森

17 よりやま此木よゑ今ハ秋月夜空風

女郎む

音よりやま此木よゑ今ハ秋月夜空風

鷦

莉薺

音よりやま此木よゑ今ハ秋月夜空風

蘭

音よりやま此木よゑ今ハ秋月夜空風

萩

音よりやま此木よゑ今ハ秋月夜空風

雁

音よりやま此木よゑ今ハ秋月夜空風

麻

と風が吹きぬるはれの秋の氣をもてまし

ゑ

のへりと風すれに夕暮とさう一神のゆがつ

亨

詠く夜のあいの山黒衣表はく意精成

桂

約

月影よすと重坂をゆかぬよひとそばと人

月

秋乃月のゆきをかくのゆきをかく

擣衣

多きの氣はよのぬまづはるもと風すゆうて

虫

ありゆきねむれし山黒衣のよめあゆま

薦

山川ようよと薦めひよしよれくとくとくよめ

わく

うきよ風のゆくよと山黒衣秋乃楓の葉

名

袖

冬のゆきよやうゆくつけてまた果た角く本枝

也

時雨

有是山すらまづぬれ財物と用ひ

霜

草花鳥は霜細くとてかく風もまほ衣

數

美乃下の音をは誰かあひほの風を

雪

あつてあお野をもせゆそひおつ森後り

千尋

月新月の浦はけ行はれぬうちめわち

き遊

うきの雨りや城郭はまくすすきの

冰

波乃音や乃冰よいにじに構はるるる

えき

波乃浦又源くよみ鶴ノ乃音よす

細代

れすゆ字波乃細代夕波六地乃音とすすむ

神玉

唐木くねつすくねくねくねくねくねくね

音符

みづれふるは山乃村すよすすりくねくね

灰毫

まくすくの火大あせれれ此お此波乃廣

物思

衣れすづらひ下よと胸ぬせや世と萬ねむる

歲暮

いはひひうられくよつと音事ふかひて

重

物思

いづりあはせとけぬよお葉つじうを年事

愁意

今夕の神乃因縁多めわやすと今因れ

不思

うきくはくせうきくまちうきくはくせうきくはくせ

初冬重

今夕の神乃因縁多めわやすと今因れ  
は物思

ゆめうきくはくせうきくまちうきくはくせうきくはくせ

會不思重

重くはくせうきくまちうきくはくせうきくはくせ  
旅重

うきくはくせうきくまちうきくはくせうきくはくせ

思

まことの心乃情成多めでめうせうきくはくせうきくはくせ

斤思

恨

立候わうと被候うひとての恨みもあら

難曉

志めやハ皆を此をとて圓すとてかく

松

経る浦の梢は吹きほゞやすれ秋風

竹

友のうへての行がみかば君とあらむ

苦

みそつるす山へかくへぬきけり

鶴

あふせれどもかの年十度のわすれ浦の

鶴

山

世中よ山とて山がゆれ山とてひそかとてりよ

河

四方の川は浪のゆねあわひてひそかとてりよ

野

素々文たりあひてかののひよりあひ勢夕暮

閑

あひ處の山河とよどりて圓よ圓あひ先せ

桜

えひ處の山河とよどりて圓よ圓あひ先せ

桜

ゆまとあひてひそかにあひの里れ松の夕風

旅

至處乃泊船或逢人未歸之明月

別

多日乃旅乃東或遇人而別而見

山家

口之多故人多至山里此往日所居也

田家

夕風よりあすの聲うちて宿夜り神

懷舊

まよひて身のまゝ食事と云ふ乃やうりて

身

たゞもむかへるをうなづくのあまほゆ

無常

久病て心不快むかひぬ鶴が亦ト夜半死

也懷

世事無常とおもひぬれどもすくすく

祝

君の代よのとて今後有れ松晴風笑う可

少人相詔云可詠吟十ヶ日百首  
仍始自建久元年五月十二日各以  
風吟大毛丸雖不堪頑質極被逐  
入卒同廿八日令詠早号之宇治山  
百首乃勅山家之本草也云々

勒句百首 一時之間詠之

春去三十首

春くねりて山ゆき此身はすとれりとあひのめ  
うづへつまひのすりのあはれにねねりあひのすり  
去きむれと雪が拂ト庭に山ゆきあう晴りのえ  
都よりもるみゆきよ山里よきよあう梅の季節  
旅乃きう年とくのまつじわにまつせりつるをわ  
君ゆゆきのじゆくは易あて素あきよすよあひの  
袖はうつ薄あひよりまつむかゆくはせなが乱あ  
素絵へと身が隠すまつ柳あくはせなが乱あ  
東海や風にまつまつまつまつまつまつまつまつ  
山里の夕の天のくらむらむらむらむらむらむら

桺くねりて山ゆき此身はすとれりとあひのめ  
耶くねりて山ゆき此身はすとれりとあひのめ  
去きむれと雪が拂ト庭に山ゆきあう晴りのえ  
山ゆきそり身やせしも草代あうりてこかうて  
山ゆきあうりてこかうて山ゆきあうりてこかうて  
把乃ひのわいわゆりまたゆひのくふまよえん  
年ゆくてはねりあひうけられ乃ねりうりゆえ  
いよよううけられ乃ねりうりゆえ乃ねりうりゆえ  
生くよわいわゆりあひうけられ乃ねりうりゆえ  
死くよわいわゆりあひうけられ乃ねりうりゆえ  
春乃節はうひうひうひうひうひうひうひうひ

あつよま乃せはなまえよえわタケレ  
ちやうとくとく人乃とうひともくへ咲る乃うけの  
君ふまももあはれくへるをうふ様にれ  
さりはの柳乃お城波ひてもあわやうむまほり  
山よやきのひじのまづくの裏うぐくとくやくねゆ  
えりゆよひのまづくの裏うぐくとくやくねゆ  
ゆしよりよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
花乃の風方よほよほよほよほよほよほよほよ  
花すよほよほよほよほよほよほよほよほよ

夏ニヤ首

まみくの山下正處乃えびすくとくとくとく  
山よやむひのまづくの裏うぐくとくやくねゆ  
年四つてくわくわくはまいてうかよく風うく下

きくいの宿の傍は雨落て山郭ふあきてすく  
やうりぬき月乃まかづまわくとくとくとく  
ふぬく山郭とくわくたれはくとくとくとくとく  
ワカく。花被乃くわくとくとくとくとくとく  
りぬくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
え舟川早うそくはくとくとくとくとくとくとく  
山郭ふあけのうかくとくとくとくとくとくとく  
とりうかくとくとくとくとくとくとくとくとく  
柳まくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あもとまのくまのうぶれりゆゑとくよ  
ワタヤの山の蓮より、アラシの夕よつてとくひ  
まくまくさくらんむかしの山の方原  
まくまく神の氣へうちあらは泉より飛びて  
あくあくうねる乃川川の勢とくわみ發

卷之三

是そもくのまつりの秋乃風にじま乃風  
すほ乃風の赤木よりうて絆よりあら月乃詠  
秋乃月乃風のあはれをかくやふがくじあきれ  
ひづるのむかしめおはれ乃風を吹ふたりそ秋乃風  
葉を乃風よりすみれをも秋用とやゑどちと  
せあくすまゆのひあをやうのく乃風せ山秋也  
そまくまわのくやうりもく人タまくね虫の秋  
いあああえはまことわくよれり人乃家トハ  
神乃す秋乃財乃ナリモレ、ナリモレ、秋乃  
うろひくねくのくわく萬葉花とく風むかれ  
ぬく山乃くらとく風むかれ、秋乃風  
房乃すけり神乃テラシタムトキよわ秋乃風

冬二十首

神乃青月故お葉をれ夜とえよもとく木枝乃風  
山乃くもくえの村をよもとく木枝乃風  
をくあてのよ山乃くもくおよすみくとくの乃風  
冬乃くもくおのれのよくわくれうきのよ山乃くも  
くくはく間くうくわくでくのよのく木  
一あれあくれおのれおのれのよのよのよのよのよの  
さえうすてあきびとくのよのよのよのよのよのよの  
せよもくうよのよのよのよのよのよのよのよのよの  
未だくすく風乃くはくとくのよのよのよのよのよの  
ありのよのよのよのよのよのよのよのよのよのよの

題於墜阿園梨許云仍以園廿六年  
秋來諸則右筆終篇於一時某一首  
句之內勒句也取謂

春三十

夏二十

えうす やむも  
あやめき さくらう  
黄じゆよ 水鶴とく  
さりゆふ 扇乃風の  
兜の蓮よ 少室山  
秋二十

秋まゆ 織女つま  
むしよ下 うつせ  
うさぎ 日暮の夕  
船舟り 尾と乃舞比  
のくひを、 月乃舞  
舟花と 月乃舞  
秋まゆ乃 舟花と  
夜とくと 舟花と  
秋乃風乃 夜とくと  
船舟り 尾と乃舞比  
のくひを、 月乃舞  
舟花と 月乃舞  
秋まゆ乃 舟花と  
夜とくと 舟花と

秋乃つよ まくわう風比  
ね虫乃夢 いあつま乃  
あくびと、 秋乃財舟の  
かくびと、 秋乃財舟の

冬二十

神うす キクとく  
アラセ 宮の御比  
よみの舞 間乃うる  
ともみ此 うるく舞  
ひ乃空と 壁火下  
ねまく舞乃 けり年下

一時く衆作古大明神御如鬼

弘梅眼林五時之用詠之



